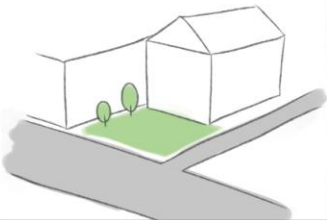
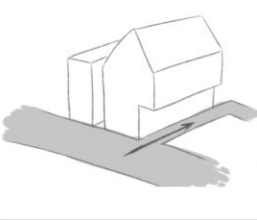


①小広場型：空を小さな緑の空間に



②通り型：新たな路地を導入する



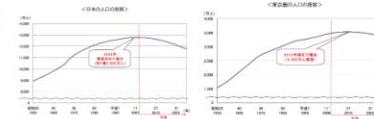
③隣接型：公共空間のすぐ近くに



人口増減について

我が国の人口は2005(平成17)年、ついに減少局面を迎えた。人口減少社会の到来は、もはや危惧ではなく、予想を上回る早さで現実のものとなった。晩婚化、非婚化などの影響により、合計特殊出生率が現在の人口を維持する水準を大幅に下回って推移しており、少子化の進行には歯止めがかかっていない。一方、平均寿命の伸長により、高齢化も急速に進行している。今後も少子高齢化は進行し、我が国の人口は大幅に減少していくものと見込まれている。

東京都の総人口は今後も増加を続けるが、増加幅は徐々に縮小し、平成32年にピークを迎えたのち、減少に転じる。ピーク時の平成32年の人口は1335万人となり、平成47年には1278万人となる。平成32年までは社会増の増加幅が自然減の減少幅を上回ることによって人口増加が続くが、その後自然減の減少幅が社会増の増加幅を上回り、総人口は減少に転じる。



空き家問題

空き家のもたらす問題として、国土交通省が平成21年に全国の市区町村を対象に行ったアンケート調査によれば、治安の低下や犯罪の発生、安全性の低下、雑草繁茂や不法投棄の誘発による公衆衛生の低下、景観の悪化や地域イメージの低下が挙げられる。

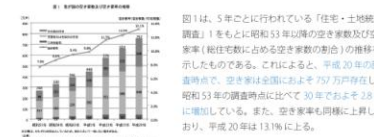


図14は、5年ごとに行われている「住宅・土地統計調査」をもとに昭和53年以降の空き家数及び空き家率(居住宅数に占める空き家数の割合)の推移を示したものである。これによると、平成30年の調査時点で、空き家率は前年より約1.7%増となり、昭和53年の調査時点に比べて30年間でおよそ2.8倍に増加している。また、空き家率も同様に上昇しており、平成20年は13.1%に上る。

東麻布地区について

麻布地区は港区の西部に位置し、西側は渋谷区、南側は高輪地区、東側は芝地区、北側は赤坂地区に接している。麻布地区の面積は約3,79k㎡、港区の19%を占めている。港区の中では芝浦南地区、芝地区、赤坂地区に次いで4番目の大きさで、麻布地区は地勢で見ると、港区の中では台地から低地に移る境目を多く含み、多くの坂がある。

人口増加数についても区市町村別人口増減数(平成22年→平成47年)では、江東区30,839人、世田谷区25,262人、中央区20,817人、港区19,682人と4番目に多い地区のひとつである。

東麻布地区内には東麻布商店街として商店の街としての顔と、2つの区立公園と飯倉いきいきプラザという公共施設があるため、日中は親子連れや年配の方を街でよく見かける。そのため、地区内は落ち着いた住宅地として感じられる。

街に展開する共有空間

一般的にシェアハウスの構成は個室と共有空間で構成されている。私はこの共有空間に街に開く方法として、利用できないか考えた。一般的な共有空間はその住民や一部の来客向けにしか利用できなかった。共有空間を街に展開する空間を組み合わせ、その共有空間を点在させることで街に多様な顔となるように計画した。



港区_東麻布地区



設計主旨

私はこの地区を再構築する目的で「都市に集まって住む集合住宅」として計画地に選定した。人は集まって住むことで都市を形成する。都市の中に多様な集まりがあると自然にそこは賑やかになり、楽しくなる。つまり、集まって住むことは、そこで育まれる日常的なコミュニティと共に生きている。それはどこの世界都市でも確認できる。都市から郊外に移り住むことは今までの多様だった街の姿は空白状態になり、街の賑わいは衰退傾向になる。東京も例外ではない。核家族がひとつの家に住むという型が壊れ始め、現在の東京では単身者や夫婦家族といった単身・少数家族世帯向けの住まいの需要が上がっている。私は単身・少数家族世帯を受け入れる「受け皿」のような住まいのシェアハウスをこの街に展開していき、同時に多様な表情がある住まいを地区内に数力所配置し、ここではシェアハウスを軸に計画設計をした。

東京工芸大学 大学院 佐藤光将

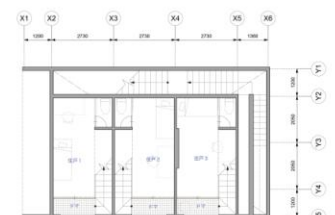
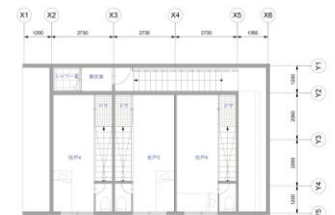
+aの共有空間

港区_東麻布地区

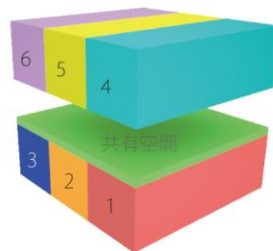


都市住居をいかにデザインするか、この問題は個々の家族の住む空間を快適に設計するかだけではなく、集合していかに公共の都市空間をつくり出すか、という問題として捉えなくてはならない。

つまり、都市住居とは内なる個々の生活をつくとともに、外なる共同の空間をつくり出すと考えた。このシェアハウスでは共有空間に広場を組み合わせ、住み手と周辺の公共空間を身近に、都市に溢れる。



都市では人が集まるための共同で使う空地＝広場が必要である。広場とは人を優しく包み込み、ひとつの部屋のように囲んでくれる空間であると感じられるものが前提となる。つまり、部屋となった広場が「町広場」である。町広場のかたちとして①程よい囲みこみ。②人を溜まらせ、居心地よくさせる。③使い方を限定させず、人それぞれが個人の気分、又は時間、天気に応じて使い続けること。＝無限で多様な表情をもつ。広場こそ、公共の部屋であり、都市の中心である。



内部構成

出会う先は共有空間

個人の部屋と共有空間の配置を階をズラして配置し、共有空間を階の中心に配置し、上下に個室を挟むように配置計画した。このように配置したのはどの階から共有空間までの距離の均一化、個室から出てくる際に最初に顔を合わせるのが、共有空間から始まるという点で計画をした。





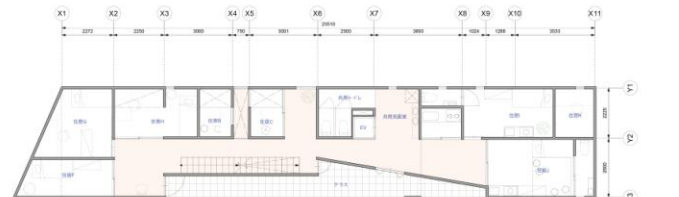
トオリミチ

新建築 2014年10月号

外観イメージ



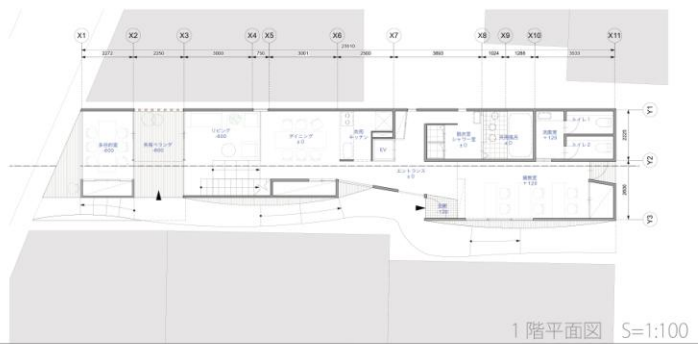
4階平面図 S=1:100



3階平面図 S=1:100



2階平面図 S=1:100



1階平面図 S=1:100



すべて良い街には表通りと裏通りが共存してる。表通りの賑わいは裏通りの静けさがあるはじめて確かなものになる。通りの空間とは建築的にうまく作られてもそれだけでは完成しない。そこに生きる人によってもたらされる。人々から何を受け、何を与えようとするか、そうした共同の願望と行動によって通りはつくられる。

この建物の西側の通りは東麻布商店街で賑わいがあり、東側は細い路地がある袋小路として静かな裏通りとなっている。そのふたつの異なる雰囲気通りの東西で繋ぐ道でこのシェアハウスの共有空間が展開している。



表通りと裏通りの交差点

隙間に出来る共有空間

このシェアハウスは大きな共有空間と個室を繋ぐのではなく、個室が集まった隙間にできる、ある程度の大きさの共有空間が特徴である。個室の開口を開放するとそのまま共有空間に直結し、住民の住み手気分で共有空間の大きさを変更できる。



内部構成



スグソバニ

シェアハウス 案3



賑やかな広場とは広場の内部の魅力だけではなく、広場周辺も重要な要因である。東麻布では飯倉公園、狸穴公園の2カ所の区立公園がある。飯倉公園は人の流れが多く、長い時間公園で遊ぶ姿が見られる。それに対して狸穴公園は活気はあまり感じられない。この2つの公園で圧倒的な違いは、周辺の建物の多様性の違いである。2つとも住宅地区にあるのに対し、飯倉公園の周辺は住宅スケールの小さな店舗が囲んでいる。それに対して狸穴公園の周りは住宅のみで、公園に向かう目的に限られる。この「スグソバニ」のシェアハウスは共有空間にカフェとして飲食が出来る商業施設が隣接されている。狸穴公園で遊ぶ際のちょっとした休憩所として展開している。



内部構成



←狸穴公園

狸穴公園に隣接する共有空間は公園利用者が休憩できるスペースとしてカフェ等の機能を配置。

1階平面図 S=1:100

隣道は車はあまり通らず、人の散歩道として利用されているので、セットバックをし、緑を植えたり休憩用のベンチを配置。

2階平面図 S=1:100



←狸穴公園

x-x' 断面図 S=1:100